

仁科記念財団

案 内

1987年6月

財団法人 仁科記念財団

仁科記念財団案内

まえがき

仁科記念財団は、記念講演の記録を載せる広報誌 NKZ に、最近の年度の活動報告を附記するようになっています。それは、理事会・評議員会に提出する「事業報告および収支計算書」の内容の一部ですが、それをなるべく広い範囲のかたがたにも伝えて、財団について関心を深めていただきたいためにほかなりません。ところが、それだけですと、かつてのような出版活動の沈滞のためでなくても、最近おきている事態のように、英文の出版物が続げまに和文の NKZ のあいだに入りこみますと、「活動報告」がとどこおって、たまってしまうことになります。また、講演記録を主とする NKZ は、講演に興味をもって、購読なさるかた、講演会を聴きに來られるかた以外に対して、財団に関する広報をおこなう手段としては、十分とは申せません。

戦前の財団法人理化学研究所は、欧文と和文の研究報告の出版のほかに、毎年、各研究室の研究題目と担当研究者の職・氏名を記した質素な小冊子を出していました。それには「寄附行為」という名の、会社などでは「定款」と呼んでいるものに当る文書も掲載されていました。その小冊子につけられていた「理化学研究所案内」という、かざり気のない名称は、当時の「理研」の気風をよく表わしていたように思います。そのことを想起してこの小冊子にもそれにあやかる名前をつけました。仁科記念財団に対して、すこしでも多くのかたに親しみをもっていただき、支持者になっていただくのに役立てば幸いと存じます。

目 次

§ 1. 仁科記念財団はつぎの事業をおこなっています	1 頁
§ 2. 仁科記念賞について	2 頁
§ 3. 仁科記念研究奨励金について	3 頁
§ 4. 仁科記念講演会について	4 頁
§ 5. 財団出版物の普及にご協力ください	7 頁
§ 6. 仁科記念文庫に加えられた図書およびフィルム	9 頁
§ 7. 仁科記念財団の活動——昭和 61 年度——	12 頁
§ 8. 「財団法人仁科記念財団設立趣意書並びに寄附行為」(抄)	16 頁
役員名簿	22 頁

§ 1. 仁科記念財団はつぎの事業をおこなっています

1. 仁科記念賞贈呈

広義の原子物理学とその応用を中心とする研究分野における卓越した業績に対して銀メダルおよび副賞を贈呈します。

2. 仁科記念講演会の開催

ひろく原子物理学とその応用を中心とする学術の進展に関連し、かつ一般の関心事にもつながる諸問題を内容とした定例の記念講演会および同じ趣旨の地方講演会を開催します。

3. 仁科記念文庫の運営

当初は仁科博士の蔵書および寄贈によって追加された多量の図書を根幹としていましたが、現在は、仁科記念室および朝永記念室にある多数の貴重な資料の整理を主としており、その成果を広く利用しやすくするための作業をおこなっています。

4. 仁科記念研究奨励金の贈呈

- a. 小規模国際シンポジウム開催を援助し、
- b. 在外研究をする若い研究者に1年または2年間の滞在費および旅費を支給します。

5. 外国のすぐれた学者の招聘

諸外国の指導的な科学者を招いて講演を依頼し、かつ我が国の研究者と交際し、討論に参加してもらいます。

6. 広報および調査

広報誌 NKZ その他講演記録等の出版、および仁科博士をめぐる科学史資料の収

集調査をおこなっています。

§ 2. 仁科記念賞について

仁科記念財団の古い出版物、たとえばNKZの創刊号には、仁科記念賞についてつぎのように書かれています。

「仁科記念賞は、原子物理学およびその応用の分野できわめて優秀な成果をおさめた研究者に贈るものであります。この賞の特色は、功成り名遂げた大先輩に贈られるのではなく、むしろこれからの活躍を大いに期待される若い研究者に贈られる点にあります。」

いろいろな賞が設けられるようになって現在の現在、仁科記念賞がここに示されている特色を失わないようにしようという方針は、当然でありましょう。この文面には、はっきりしないところがあることは否めません。しかしいかに表現を詳細にしても、結局それは実例で示すことには及ばないということも真理であります。それで、1985年版の「案内」では、特に記念賞について述べることをしませんでした。

ところが、一昨年、久保理事長の発議で、候補者の推薦を依頼するかたの範囲を拡大したと関連して、若いかたのなかには、業績を重視して、先輩を推薦なさるかたもあり得るだろうと考えました。いままでの受賞者の名を見ても、受賞当時の年齢を思いうかべることは若いかたにはできるとは限らないからです。

そこで、「若い」ということと、「応用」ということについて、どのように考えるべきかについて、アンケートで意見を求めました。かなりのかたから回答があり、「若い」という点については、年齢制限を明示されたかたもありましたが、上述の文面の常識的解釈でよいとするのが大勢のようでした。

「応用」という字句は、基礎科学における原子物理学の応用という解釈が大勢でした。今日では、物理学の全分野が原子物理学に無縁でないから、受賞の対象とする分野は、単に「物理学」とすればよいという意見もありました。境界領域の研究の重視のために、物理以外の領域を、輪番的に物理と組みあわせてその年の受賞分

野とするという考えに対しては、問題にしたかたは全員反対されました。どの分野にかぎらず、独創的な研究があらわれたら、受賞の対象とすべきだというわけです。その意味では、候補者の推薦も、なるべく広い範囲のかたにご依頼するのがよいし、推薦された候補の数が増すと、選考の仕事もそれだけ大仕事となります。そのことを考慮して、従来より推薦の締切を1カ月はやくして8月末日とした次第です。推薦依頼状がとどきましたら、ご協力くださいますよう、お願い申し上げます。

§ 3. 仁科記念研究奨励金について

この研究奨励金は、最近では、小規模国際研究集会の助成と、わが国の若い研究者の海外での共同研究への援助にあてられています。

1985年版の「案内」に書きましたように、この奨励金は1979年度までは個人研究に対し毎年数件の助成をおこなってきました。将来性のある研究に対して少額ながら効果的な、いわば「呼び水」的な役割を果たしたものですが、1980年度に、当時の財団の財政的事情にかんがみて、いっそう効果的と考えられる小規模国際研究集会の援助に切りかえて、個人研究への援助は停止しました。その復活もたしかに望ましいことですが、独創的な研究の芽を育てるという同じ役割が小規模国際研究集会によっても果たされることを期待しておる次第です。

小規模国際研究集会の助成は、つぎのような手続によっておこなっております。仁科記念賞候補者の推薦をお願いするのとおなじ範囲のかたがたに財団から依頼状を送り、推薦していただきます。推薦者に、計画の詳しい記述までお願いすることは実際的でないと考えますので、早目ととにかく推薦をしていただき、それによって申請者に書式を送って具体的な計画を記述していただきます。「小規模」国際研究集会というものの定義は、総経費(参加費を除く)500万円程度までのものとします。そしてその申請に対して仁科記念財団から200万円以内の助成をおこないます。

研究者の海外での共同研究への援助について述べますと、仁科記念財団が派遣する研究者は、単なる留学生というよりも、派遣された先の国でおこなわれる国際共

同研究の重要なスタッフとなっております。そして仁科記念財団から派遣されたということが、先方の国の大学や研究所に助手等の形で就職した場合にくらべて、ずっとよく研究能率をあげることができるというのが、いままでの海外派遣研究者の多くの人の声であります。

海外派遣研究者は公募して選考します。公募の主旨が若い研究者に徹底するように広報にご協力をお願いします。応募されるかたには、財団から選考にあたって参考にするためにご意見を伺うことのできる数名のかた（いままでの指導者および同僚）を指名してもらいます。また、滞在期間1年か2年かを明記すること、在職者のばあいには所属機関の承認が得られること、年齢が35歳未満であることが必要です。

科学研究の国際協力が今後ますます重要性を増すことを考えますと、仁科記念財団の上述の二つの助成の意義をことに若い研究者が深く理解し、それを活用するとともに、自らもその事業の発展に積極的に寄与することが望まれます。

§ 4. 仁科記念講演会について

仁科記念財団は、仁科博士の誕生日にあたる12月6日の前後に、定例の記念講演会を東京で催すほか、地方講演、高校理科教員のための講演会、外国の著名物理学者の来日のおりとか朝永博士のノーベル賞受賞の際とかの特別講演会などを、随時おこなってまいりました。

定例の仁科記念講演会は、昭和61年度ですでに32回をかぞえました。学者の名を冠したこの種の講演会で古い伝統をもつものが、欧米にはいくつもあります。そのような講演会は、永続してこそ真価が発揮されます。つぎつぎに育ってくる新しい世代が聴衆に加わるよう、年長の世代がその講演会の存在を語り伝え、白髪の老学者が若い聴衆と一緒に講演を聴く、というようになってこそ、文化的な国の講演会と言えましょう。そのようになるためには、永続すること、伝統が作りあげられることが肝要です。

仁科博士は倦むことを知らない啓蒙家でありました。博士もはじめはジャーナリズムが大きらいで、新聞記者をケンもホロロに追い返したり、わざとむずかしいことを言ってけむに巻いたりするくせがあったのですが、サイクロトロン建設をやるようになってからは、あちこちで講演したり、新聞・雑誌に書いたり、すこしも労を惜しまぬようになり、その豹変ぶりにはアッケにとられたと朝永振一郎博士は語っています。これは、巨大科学の研究費を得るためだけではありません。一般社会に基礎研究の意義を理解させる必要を強く感じられたからでありました。そのような講演に、門弟たちはしばしば宇宙線用の大きなサイズの計数管を持ってお伴をさせられたものです。

仁科記念財団の二代目理事長であった朝永博士は、師の仁科博士におとらず公開講演に熱心でありました。朝永博士の独特な話しぶりは聴衆を魅了したものです。その名人芸とも言うべき話術は、落語を愛好したためと巷間伝えられていますが、もっと根本的には、博士があくまで直観的把握を重んじ、ものの考え方の本質を伝えることに努められたからであると言うべきでしょう。朝永博士が仁科記念講演会にいかにも熱心であったかは、33回の講演会のうち9回までの講演をみずから引き受けられたことにもあらわれています。朝永博士およびそのほかの講演者たちの名講演の記録は、財団の初代理事長渋沢敬三氏の熱心な意見に従って発刊された財団の広報誌「NKZ」に掲載され、バックナンバーでそれらを読むことができます。バックナンバーのうちでもことに注目をひいているのは、朝永博士のノーベル賞受賞講演の日本語版とも言うべき1966年6月の特別講演の記録の載った「NKZ」No. 7であります。その講演はストックホルムでなされた英語の講演よりも倍も詳しく「こくのある」ものであります（その号は需要が多いため再版されました）。

朝永博士は1978年病におかされ翌年7月に他界されましたが、病床にあっても仁科記念財団のことを気かけられ、ことに記念講演会については、つぎのように言われました。

「仁科記念財団は社会に向かって開かれた窓を持たなくてはならない。記念講演会はその大切な窓の役割を果たすべきものだから、すくなくとも定例講演会は努力して続けるべきだ。随時の開催というのではルーズになりやすい。」

晩年、朝永博士は財団が準備するものとは別の、数多くの講演会で話をしておられました。仁科記念講演会については、そのような特別な意義を強調しておられたのです。

仁科記念講演会は、かつては「朝日講堂」のような大講堂を借りて、不特定の世間一般に向かって広報して来聴を待っていたのですが、朝永博士を失った財団は、いろいろ考えた結果、新しい方式を試みることにしました。以前の方式では、世間が派手になったのに負けないだけの広報をすることがむずかしく、ことに学生諸君には徹底しないうらみがありました。そこでたまたま朝日新聞社の移転で「朝日講堂」が使えなくなった事情もあり、新しい方式にきりかえたのです。それはつぎのような方式です。

仁科記念講演会を学生や若い研究者の層に広く知ってもらうために、いわば「拠点校」の大学を輪番にきめて、すくなくともその学生は来聴しやすいようにする。まず都内の大学のいくつかに順々にお願ひして会場を借り、その教授たちから学生に勧めてもらう。また他の大学の学生や若い研究者たちにも参加を呼びかける。

この方式にしてから、すでに定例講演会を8回、そのほかに同じ方式の地方講演会を5回おこないました。幸いにして新しい方式は時宜に適していたと見え、どの講演会も、多数の学生聴衆を集めて盛大におこなうことができました。

大学と共同主催でおこなう方式の長所は、その大学の学生諸君が参加しやすいことのほかに、他大学の諸君を勧誘することによって大学間のかべを低くする効果が得られる点です。さらにまた、同窓生が顔をあわせる機会にもなるでしょう。こうして、貴重な伝統が育ちつつあるのですが、しかし、つぎの点も考慮する必要があります。まわり持ちで共催する大学が4つか5つとかになりますと、当然一つの大学にとっては4年から5年の周期となり、そのあいだに学生がすっかり変わるだけでなく、教室員の異動も起こります。それゆえ、番に当たっていない大学でも、広報の点で協力していただくとか、仁科記念講演会というものの意義について、新しい教室員に申しつぎをしていただくとか、が望ましいわけです。それゆえ、機会あるごとにつぎのようなアンケートへのご協力によって、この意義ある記念講演会の永続と発展に寄与していただきたいと思ひます。

アンケート

1. あなたの大学、学部、教室名とあなたのお名前。
2. 講演会のポスターやビラを、どなたあてに送るのが適切か。
 - a. 学科事務室あて、b. 個人あて（3名以内のお名前）
3. 広報の仕方についてのご批判、ご助言。
4. 大学、学部の広報、あるいは学生新聞で、学生がよく読むものの名称、発行日、原稿締切日。
5. 大学、学部でおこなっている記念講演会、公開講座の名称、世話担当者、最近おこなわれたもののプログラム等。
6. その他、お気づきの点、ご提案。

なお、1986年版の「案内」に書いたアンケート第6項「仁科記念財団の講演記録の普及にご協力いただく方法」に関しては、次節に述べることにします。

§5. 財団出版物の普及にご協力ください

公開講演会は、仁科記念財団の重要な事業の一つですが、その講演会に来聴できなかった人のためにも考えるべきであり、講演記録をぜひ出版する必要がある、というのが、初代理事長故渋沢敬三氏の強い願望でした。また公開講演会について二代目理事長故朝永振一郎博士は、これは財団が社会に向かって開いている大切な窓だから、手をぬいてはならないという持論でした。われわれは講演会活動を活発にし、おこなわれた講演はできるかぎり記録を出版するように努力しております。そして出版されたものは、できるだけ多くの人々に読んでもらいたいと念願しております。

1. 個々のナンバーの有料頒布について

講演会の場合と同様、無料がよいという考えもあるかも知れませんが、無料で頒布すればよく普及するというものでもありませんので、有料といたします。そして、事務能力が不十分であることを考慮して、下記のようにしたいと存じます。

- (1) リストに載っているものを各冊一律に500円とする。

- (2) 郵送の場合、送料をリストに附記した概算で負担していただく。
- (3) 郵便振替を利用し、その用紙通信欄に、所属・職名等も記入していただく。

2. 図書館・図書室に置くことについて

仁科記念財団の講演記録シリーズも No. 27 にまで達しました。そして、古いものの中には、在庫切れで、再版をしたものもありますが、上述の有料頒布および財団関係者、寄附あるいは協力をしてくださったかたへの贈呈をした残りが、300部以上あります。これを死蔵すべきではないと考えて、大学や研究所のかたがたにつきのような内容のアンケート調査用紙をお送りして答えていただきました。

「仁科記念財団発行の講演記録の普及にご協力いただく方法」

- a. 図書館・図書室に有料で購入させる。
- b. 何かと交換する方式をとらせる。
- c. 無料で寄贈するものを目のつくところに置かせる。

このアンケートに回答をいただいたかたのうちの 2/3 は、c にマルをつけてこられました。a を選ばれたかたは二十数名あり、またアンケート以前に大学に有料で購入させていただいた例も二、三件ありましたが、出版の本来の主旨からいって無料で多くの人の目にふれるようにすることは望ましいことですし、また、国立の機関のばあい、会計の手続が簡単でないこともありますので、c を選んだご意見にしたがうことにして、いま準備中です。b の「何かと交換する方式」を選ばれた回答はわずかでした。当方で考えておりましたのは、筑波大学の朝永記念室で出しておられる TOM とか、京都大学理学部の「玉城嘉十郎教授記念講演」の記録のようなものです。研究所の業績報告年報の類をくださるという提案もありましたが、財団の「記念文庫」の能力不足のため、辞退いたします。

上述のアンケートに対するご回答のなかに、「無料で寄贈」がよいが「但し、財団に大きな支出負担にならないなら」というご意見がありました。財団の出版物は形がはなはだ不揃いであり、合本にするというような新たな出費を要することはいたしません。しかし、郵送料はバカになりませんので、臨時的個人寄附でそれをカバーしていただければ幸いです。

それとともに、もう一つお願いしたいのは、この講演記録シリーズに今後加えら

れるものについて、事情を知っている後継者をつくっていただくことです。図書の保管については、専門の司書に世話をやいてもらうことになりましょうが、こういう些細な寄附というものは、係の人が事情を知らないと軽視されがちです。記念講演会の共同主催についてと同様に、わかい教室員への申しつぎの点でご配慮いただきたいと思えます。

§ 6. 仁科記念文庫に加えられた図書およびフィルム

図書

1. ニールス・ボーア生誕百年に際してコペンハーゲンで催された Niels Bohr Centenary Symposium, October 3-7, 1985 の記録：

The Lesson of Quantum Theory, North-Holland for the Royal Danish Academy of Sciences and Letters, 1986, B 5 判 383 ページ。

を購入しました。

2. 助成金を贈呈した小規模国際研究集会の組織者から、集会の終了後、会計報告を提出してもらうほか、「もし刊行されるのであれば、Proceeding など」をいただくようお願いしてありますが、いままでにつぎのような書籍が来ております。

——リストの括弧内数字とアルファベットは、集会の年度と番号——

[1980] Symposium on Space Astrophysics, July 1980, Tokyo. B 5 判 293 ページ

[1981 a] 1981 INS Symposium on Quark and Lepton Physics, Tokyo, June 25~27, 1981, B 5 判 371 ページ, 東京大学原子核研究所

[1982 a] Gauge Theory and Gravitation, Proceedings, Nara, Japan, 1982. B 5 判 316 ページ, Springer-Verlag, 1983, Lecture Notes in Physics 176

[1983 a] 1983 RCNP International Symposium on Light Ion Reaction Mech-

- anism, May 16~20, 1983, Osaka. B 5 判 142ページの予稿とB 5 判 929ページの Proceedings, 大阪大学核物理研究センター
- [1983 b] Proceedings of the International Symposium on Foundation of Quantum Mechanics in the Light of New Technology, Tokyo, August 29~31, 1983. B 5 判 377ページ, 日本物理学会, 1984
- [1983 c] Proceedings of International Symposium on Cosmic Rays and Particle Physics, March 19~23, 1984, Tokyo. B 5 判 852ページ, 東京大学宇宙線研究所
- [1984 c] 1984 INS-Riken International Symposium on Heavy Ion Physics, Part I. New Scope of Heavy Ion Science, Tokyo, August 24~25, 1984. B 5 判 207ページ, 同上, Part II, Heavy Ion Nuclear Physics. Mt. Fuji, August 27~31, 1984, B 5 判 584ページ, 日本物理学会, Supplement to the Journal of the Phys. Soc. of Japan, Vol. 54, 1985
- [1984 e] Spectroscopic Studies of Absorbates on Solid Surfaces SAS '84, Hyogo, Japan. Sept. 3~5, 1984, B 5 判 693ページ, North-Holland, 1985
- [1985 a] The 5th International Conference on Crystalline Field and Anomalous Mixing Effects in f-Electron Systems, April 15~18, 1985, Sendai, Japan. (Program and Abstracts, B 5 判 157ページ) Proceedings, B 5 判 478ページ, North-Holland, 1985
- [1985 c] International Symposium on Graphite Intercalation Compounds, May 27~30, 1985, Tsukuba, Japan. (Abstracts B 5 判 89ページ, Author Index 20ページ) Proceedings B 5 判 554ページ, Elsevier Sequoia S.A., 1985
- [1985 d] The 8th International Symposium on Exoelectron Emission and Applications, August 25~30, 1985, Osaka, Japan. (Abstracts B 5 判 140ページ, 大阪大学産業科学研究所, 1985) Proceedings A 4 判 291ページ, 応用物理学会欧文誌刊行会, Japanese Journal of Applied

Physics, Vol. 24 (1985) Supplement 24.4

- [1985 e] The 6th International Symposium on Polarization Phenomena in Nuclear Physics, Osaka, August 26~30, 1985. B 5判 1175ページ, 日本物理学会, Supplement to the Journal of Phys. Soc. of Japan, Vol. 55, 1986
- [1986 b] Joint Japan-China Seminar II on Superconductivity. Sendai, May 12~14, 1986. A 4判 150ページ, 東北大学金属材料研究所, 1986
- [1986 c] Dynamical Processes of Highly Charged Ions, Proceedings of an International Seminar (Satellite to the Xth ICAP) Fuji, Japan, August 21~24, 1986. B 5判 94ページ, 理化学研究所, 1986
- [1986 d] International Workshop on Few-Body Approaches to Nuclear Reactions in Tandem and Cyclotron Energy Regions, Tokyo, August 22~24, 1986. Program A 4判 25ページ, 東京理科大学, 1986
- [1986 e] International Symposium on Muon-Catalyzed Fusion, μ CF-86 (Satellite Meeting to the Xth ICAP) Univ. of Tokyo, Sept. 1~3, 1986, Abstracts of Papers A 4判 65ページ, 東京大学中間子科学研究室, 理化学研究所共編, 1986

フィルム

ニールス・ボーア生誕百年記念として、1985年にデンマーク政府の Film Office がデンマーク外務省、教育省および文化省の後援のもとに、デンマークの映画ディレクター、オール・ジョンに依嘱して製作したニールス・ボーアの一生をえがいたフィルム：

“NIELS BOHR” 2巻 (英語版)

を購入しました。このフィルムの上映は、それを希望する大学や研究所からの申し込みにより、仁科記念財団との共同主催の形の集会でおこなうことにします。

§ 7. 仁科記念財団の活動

— 昭和61年度 —

1. 仁科記念賞

本年度は下記3件3氏の研究に対して贈呈した。

受賞者 東京大学理学部教授 鈴木増雄

研究題目 相転移秩序形成及び量子多体系の統計物理学

推薦理由 多数の原子でできたマクロな物質は、原子間相互作用のため原子配列やスピン配向に関する種々の秩序を示す。その秩序がある温度で質的に変化する「相転移」の中でも、融解・蒸発のような潜熱をもたず比熱が不連続に変化する「二次相転移」では、他の物理量も種々特異なふるまいをする。鈴木氏は、動的物理量が示す特異性について従来の常識を覆す理論を得て、その後の理論発展の端緒をつくり、またスピングラス(金属中にスピンを持つ不純物をランダムにちりばめたもの)相転移点で非線形帯磁率が発散することを予言し、これは実験家によって検証された。またスピンなど量子系の結晶格子に関する統計力学の数値計算を実行可能にするための「量子モンテカルロ法」を提唱、開発し、これは各国で盛んに応用されて相転移研究に新生面を開きつつある。鈴木氏はさらに非平衡状態に関しても、不安定状態で発生した小さなゆらぎが生長して巨視的秩序を形成してゆく過程を取扱う「非線形スケールリング理論」を提唱し、これは超放射、レーザー、相転移、プラズマ、原子核反応など極めて広汎な問題に応用されてその有効性が実証されつつある。平衡および非平衡系の統計物理学における鈴木氏の功績は誠に大きい。

受賞者 広島大学理論物理学研究所教授 藤川和男

研究題目 場の量子論における異常項の研究

推薦理由 同氏の今回受賞対象となった仕事は、ゲージ理論のくりこみ可能性に関して基本的重要性をもつ、いわゆる「異常性」に対して、より深い理解をもたらしたものである。場の量子論においてはその古典論とちがいで、発散の問題があるた

めにゲージ不変性が必ずしも一般には保たれない。藤川氏の仕事は、その事情を経路積分の方法によって極めて明快に示した。

つまり、作用関数はゲージ不変であっても積分の測度が必ずしもゲージ不変には出来ない場合があるというわけである。それは、ゲージ場のトポロジーが有意の場合のフェルミ場の測度に典型的にあらわれる。「藤川の方法」は、それまでの摂動論による方法にくらべて、はるかに一般的でわかりやすいものであって、今日では標準的な方法として認められている。

受賞者 広島大学核融合理論研究センター教授 佐藤 哲也

研究題目 散逸性磁気流体プラズマの非線形ダイナミクス

推薦理由 天体や核融合装置では、磁力線の結び変わりを伴う現象がしばしば見られる。太陽系空間では太陽風やオーロラ嵐などの現象がこれに関係し、核融合装置では磁場の配位の破壊をもたらす。平衡に近い磁気流体という前提で磁力線の結び変わりを説明しようという試みはあったが、実際に起こっている現象は桁違いに速く、高エネルギー粒子の加速をひき起こすほどのものであった。これに対し、佐藤哲也氏は「外部駆動磁力再結合」という新しい概念を導入し、磁気流体の運動エネルギーの集中がマクロなスケールでの急激な散逸をひき起こすことを示して、この問題に根本的な解決を与えた。彼はこの新しい概念を適用して広く数値シミュレーションを行い、地球磁気圏の諸現象、各種の核融合装置で起こっている不安定現象を統一的に説明した。これに留まることなく、磁場のトポロジーの変化と散逸を考慮した磁気流体の巨視的発展に関する統一的解釈に理論を高め、非線形磁気流体力学へ発展させる基礎をつくったものである。

2. 仁科記念講演会

本年度は次の記念講演会を開催した。

a. 1982年ノーベル化学賞受賞者クルーグ教授を招いての講演会

(東京大学理学部・日本生物物理学会と共同主催)

日時 昭和61年4月18日(金)午後3時30分～5時(開場3時)

場所 東京大学理学部4号館2階1220号室

講演 Hierarchies in Chromosome Structure (染色体構造—その階層性)

Aaron Klug 教授 (M.R.C. 分子生物学研究所, 英国)

なお, クルグ教授には下記においても講演をしていただいた。

4月24日(木) 京大会館(京都大学理学部生物物理学教室・日本生物物理学
会と共同主催)

b. 第32回定例講演会

(東京都立大学理学部と共同主催)

日時 昭和61年12月6日(土) 午後2時30分～4時(開場2時)

場所 東京都立大学目黒校舎新学館ホール

講演 電波観測で宇宙をさぐる

東京大学教授 森本雅樹

(東京天文台野辺山宇宙電波観測所)

3. 仁科記念奨励金

- a. 対象：“基本力の大統一に関する第7回ワークショップと重粒子数非保存”に
関する1986国際コロキウム 1986年4月16日～4月18日

金額：1,000,000円

代表者：東京大学理学部素粒子物理国際センター, センター長 小柴昌俊

参加者：国内 105名, 国外 50名

- b. 対象：“超伝導”に関する第2回日中セミナー 1986年5月12日～5月14日

金額：800,000円

代表者：東北大学金属材料研究所教授 武藤芳雄

参加者：国内 58名, 国外 10名

- c. 対象：“高電離イオンの動的過程”に関する国際セミナー 1986年8月21日
～8月24日

金額：1,000,000円

代表者：理化学研究所副主任研究員 栗屋容子

参加者：国内 38名, 国外 20名

- d. 対象：“小数体系としての原子核反応, タンデムおよびサイクロトロン領域の

取り扱い” 国際会議 1986年 8月22日～8月24日

金額：450,000円

代表者：東京理科大学理工学部助教授 尾立晋祥

参加者：国内 35名, 国外 32名

e. 対象：“ミュオン核融合” 国際会議 1986年 9月1日～9月3日

金額：1,000,000円

代表者：東京大学理学部中間子科学実験施設助教授 永嶺謙忠

参加者：国内 42名, 国外 33名

4. 研究者の海外派遣

昭和61年度海外派遣研究者

大阪大学教養部助手 川村 光

留学先 コーネル大学 (米国)

研究目的 相転移現象の統計力学的研究

理化学研究所研究員 神原 正

留学先 マックスプランク核物理学研究所 (西独)

研究目的 加速器を用いた原子衝突過程の実験

5. その他

高エネルギー物理学研究所の西川哲治所長の講演 (1983年12月) の記録「素粒子の素粒子 “クォーク” をさぐる」—Publication No. 25; シカゴ大学の南部陽一郎教授の講演 (1985年4月) の記録「“素粒子” は粒子か?」—Publication No. 26; Supplement to the Publications No. 17 [G. Hevesy - Y. Nishina, Correspondence 1928~1949], No. 20 [Y. Nishina's Correspondence with N. Bohr and Copenhageners 1928~1949], and No. 21 [Y. Nishina's Letters to N. Bohr, G. Hevesy and Others 1923~1928]—Publication No. 27 を出版した。

なお, Publication No. 3 [朝永振一郎: 「放射能の話」] は在庫が乏しくなったので再版した。

§ 8. 「財団法人仁科記念財団設立趣意書並びに寄附行為」(抄)

委大第164号

財団法人 仁科記念財団

設立代表者 渋 沢 敬 三

昭和30年11月10日付で申請のあった財団法人仁科記念財団の設立を民法第34条によって許可します。

昭和30年12月5日

文部大臣 清 瀬 一 郎

財団法人仁科記念財団設立趣意書

文化勲章受賞者、日本学士院会員故仁科芳雄博士は、わが国の原子物理学の創始者であり、湯川博士等、世界的学者の育ての親でありました。博士が戦前、当時世界で第一級の大サイクロトロンを建設されたことは、そのサイクロトロンの悲劇的最後とともに、あまねく世に知られているところであります。

故仁科博士は、世界的な原子物理学者であったのみならず、戦後国歩艱難の時期に際しては、旧財団法人理化学研究所を潰滅の危機から救って株式会社科学研究所を興し、科学技術こそ国の経済復興の原動力であるという信念を貫かれ、身をもってこれを実践されました。博士はまた、その学識と円満な人格によって世界の学界の信望を一身にあつめられ、博士の存在がわが国の国際社会へのすみやかな復帰に大きな助けとなったことも、永く忘れることのできない点であります。

おもうに科学技術の振興は、国の自立復興上、万難を排して成し遂げなければならない喫緊事であります。なかんずく、博士が生前心血をそそがれた原子物理学が、人類文明にとっていかに重大な影響を与えつつあるかは、万人のよく知るところであります。原子力の重要性はいうまでもありませんが、原子物理学は今日先進諸国においては、生物学、工学、農学、医学等に広く応用されるほか、生産技術の方面

にも根本的変革をもたらしつつあり、この分野の著しい立ち遅れを克服することは、わが国の当面する重要課題の一つであります。

以上の趣旨により、今回私共は故仁科博士を記念し、原子物理学とその応用に関する研究の振興を目的として、仁科記念賞の授与、研究奨励金の交付、海外学者の招聘、研究者の海外派遣、記念文庫の設置、記念講演会の開催等の事業を行うために、広く各界からの御寄附を仰いできましたところ、国内および海外各方面から多数の方々の御賛同をえて、ここに2000万円に達する募金をみるに至りました。「仁科記念財団」はこの寄附金と故博士の蔵書とをもって設立されるものであります。

昨今わが国においても原子力の平和利用が声高く叫ばれておりますが、その健全なる発展は基礎科学とその応用との調和なくしてはこれを望むことはできません。この調和こそ故博士の理想とせられたところであり、本財団は必ずやその成果を挙げ、わが国科学技術の発展に寄与するのみならず、世界の原子物理学の進展に貢献せんとするものであります。

財団法人仁科記念財団寄附行為（抄）

第1章 総 則

第1条 この法人は、財団法人仁科記念財団という。

第2条 この法人は、事務所を東京都文京区本駒込2丁目28番45号におく。

第2章 目的および事業

第3条 この法人は、故仁科芳雄博士のわが国および世界の学術文化に対する功績を記念して、原子物理学およびその応用を中心とする科学技術の振興と学術文化の交流を図り、もってわが国の学術および国民生活の向上発展、ひいては世界文化の進歩に寄与することを目的とする。

第4条 この法人は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

1. 原子物理学およびその応用に関する研究において、きわめて優秀な成果を収め

た者に対する仁科記念賞の授与

2. 原子物理学およびその応用に関する仁科記念講演会の開催
3. 原子物理学およびその応用に関する図書を蒐集公開する仁科記念文庫の経営
4. 原子物理学およびその応用に関する研究を行う研究機関および個人に対する仁科記念奨励金の授与
5. 原子物理学およびその応用に関する研究を行う学者の招聘および海外派遣
6. 原子物理学およびその応用に関する知識の普及を目的とする出版物の刊行
7. その他前条の目的を達成するために必要な事業

第3章 資産および会計

第5条 この法人の資産は、次のとおりとする。

1. この法人設立の当初に仁科記念財団設立発起人会が寄附した別紙財産目録記載の財産
2. 資産から生ずる果実
3. 事業に伴う収入
4. 寄附金品
5. その他の収入

第6条 この法人の資産を分けて基本財産および運用財産の二種とする。

基本財産は、別紙財産目録のうち基本財産の部に記載する資産および将来基本財産に編入される資産で構成する。

運用財産は、基本財産以外の資産とする。ただし、寄附金品であって寄附者の指定あるものは、その指定に従う。

第7条—第10条 略

第11条 この法人の決算は、会計年度終了後2ヶ月以内に理事長が作成し、財産目録、事業報告書および財産増減事由書とともに監事の意見をつけて理事会の承認を受け文部大臣に報告しなければならない。

この法人の決算に剰余金があるときは、理事会の議決を経て、その一部または全部を基本財産に編入し、あるいは翌年度に繰越すものとする。

第12条—第13条 略

第4章 役員、評議員および職員

第14条 この法人には、次の役員をおく。

理事 20名以上25名以内（内理事長1名、常務理事3名以内）

監事 2名以上4名以内

第15条 理事および監事は、評議員会でこれを選任し、理事は、互選で理事長1名、常務理事3名以内を定める。

第16条 理事長は、この法人の事務を総理し、この法人を代表する。

理事長に事故があるとき、または理事長が欠けたときは、理事長があらかじめ指名した常務理事が、その職務を代行する。

常務理事は、理事長を補佐し、理事会の決議に基づいて日常の事務に従事する。

第17条 理事は、理事会を組織し、この法人の業務を議決し執行する。

第18条 監事は、民法第59条に定める職務を行う。

第19条 この法人の役員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

補欠による役員の任期は、前任者の残任期間とする。

役員は、その任期満了後でも、後任者が就任するまでは、なお、その職務を行う。

役員は、この法人の役員たるにふさわしくない行為のあった場合、または、特別の事情のある場合には、その任期中でも評議員会および理事会の議決によってこれを解任することができる。

第20条 役員は、有給とすることができる。

第21条 この法人には、評議員60名以上70名以内をおく。評議員は、理事会でこれを選出し、理事長が委嘱する。評議員には、第19条を準用する。この場合には同条中「役員」とあるのは、「評議員」と読み替えるものとする。

第22条 評議員は、評議員会を組織し、この寄附行為に定める事項のほか、理事会の諮問に応じ、理事長に対して助言する。

第23条 この法人に顧問若干名をおくことができる。顧問は、理事会でこれを選出

し、理事長が委嘱する。

顧問の任期については第19条を準用する。この場合には、同条中「役員」とあるのは、「顧問」と読み替えるものとする。

第24条 この法人に事務を処理するために書記等の職員をおく。

職員は、理事長が任免する。

職員は、有給とする。

第5章 会議

第25条 理事会は、毎年2回理事長が招集する。ただし、理事長が必要と認めた場合、または理事現在数の3分の1以上から会議の目的事項を示して請求のあったときは、理事長は、臨事理事会を招集しなければならない。

理事会の議長は、理事長とする。

第26条 理事会は、理事現在数の3分の2以上が出席しなければ議事を開き議決することができない。ただし、当該議事について書面をもって、あらかじめ意思を表示した者は、出席者とみなす。理事会の議事は、この寄附行為に別段の定めがある場合を除くほか、出席理事の過半数をもって決し、可否同数のときは議長が決する。

第27条 次に掲げる事項については、理事会において、あらかじめ評議員会の意見を聞かなければならない。

1. 予算および決算に関する事項
2. 不動産の買入れ、または基本財産の処分に関する事項
3. その他この法人の業務に関する重要事項で理事会において必要と認めた事項

第25条および前条は、評議員会にこれを準用する。この場合には、第25条および前条中「理事会」および「理事」とあるのは、それぞれ「評議員会」および「評議員」と読み替えるものとする。

第28条 すべての会議には、議事録を作成し、議長および出席者代表2名が署名捺印した上で、これを保存しなければならない。

第6章 寄附行為の変更ならびに解散

第29条 この寄附行為は、理事現在数および評議員現在数のおのおの3分の2以上の同意を経、かつ、文部大臣の認可を受けなければ、変更することができない。

第30条 この法人を解散するには、理事現在数および評議員現在数のおのおの4分の3以上の同意を経、かつ、文部大臣の許可を受けなければならない。

第31条 この法人の解散に伴う残余財産は、理事全員の合意を経、かつ、文部大臣の許可を受けて、この法人の目的に類似の目的を有する公益事業に寄附するものとする。

第7章 補 則

第32条 この寄附行為の施行についての細則は、理事会の議決をもって別に定める。

付 則

第33条 この法人設立当初の理事および監事は、次のとおりである。

理事(理事長)	渋 沢 敬 三	理事(常務理事)	朝 永 振一郎
理事(常務理事)	村 越 司	理事	石 川 一 郎
理事	植 村 甲午郎	理事	亀 山 直 人
理事	酒 井 杏之助	理事	瀬 藤 象 二
理事	原 安三郎	理事	藤 山 愛一郎
理事	我 妻 栄	監事	茅 誠 司
監事	武 見 太 郎	監事	二 見 貴知雄

昭和34年6月1日 一部(事務所所在地) 変更認可

昭和41年11月8日 一部(理事および評議員の定数) 変更認可

役 員 名 簿

(昭和62年 6月現在)

理 事 長	久保 亮五						
常 務 理 事	鎌田 甲一	玉木 英彦	宮崎友喜雄				
理 事	芦原 義重	安藤 豊禄	稲山 嘉寛	井上 薫			
	太田 清蔵	鹿島 昭一	茅 誠司	野地 紀一			
	鳩山 道夫	浜田 達二	林 主税	土方 武			
	平岩 外四	堀田 庄三	三浦 功	三田 勝茂			
	宮島 龍興	山村 雄一	渡里杉一郎				
監 事	池田 長生	小山 五郎	佐々木秋生	瀬川美能留			
評 議 員	赤堀 四郎	芦原 義重	有山 兼孝	安藤 豊禄			
	飯尾 正宏	池田 長生	伊藤 達二	稲山 嘉寛			
	井上 薫	岩佐 凱実	植村 泰忠	江口 禎而			
	江戸 英雄	太田 清蔵	岡本 耕輔	小田 稔			
	鹿島 昭一	鎌田 甲一	上坪 宏道	茅 誠司			
	木村健二郎	久保 亮五	小谷 正雄	小林 稔			
	小山 五郎	坂井 光夫	佐々木秋生	杉本 正雄			
	瀬川美能留	関本 忠弘	竹内 征	竹中 鍊一			
	田島 英三	玉木 英彦	豊沢 豊	中根 良平			
	西川 哲治	西島 和彦	仁科雄一郎	西村 純			
	野地 紀一	鳩山 道夫	花村仁八郎	浜田 達二			
	早川 幸男	林 主税	土方 武	平岩 外四			
	弘世 現	福井 伸二	藤井 忠男	伏見 康治			
	堀田 庄三	丸森 寿夫	三浦 功	三田 勝茂			
	宮崎友喜雄	宮沢 弘成	宮島 龍興	向坊 隆			
	山崎 敏光	山村 雄一	山本源左衛門	芳田 奎			
	渡里杉一郎	和田 昭允					
顧 問	村越 司						

財団法人 仁科記念財団

113 東京都文京区本駒込2丁目28番45号

電話 東京03(946)7111(代表)

郵便振替番号 東京3-135934

(1987年6月) 1,200